静岡第一テレビ

事業の名称

Daiichi－TV開局45周年記念 メディアリテラシー シンポジウム
「災害情報のウソ・ホント～メディア情報を読み解く」

共同で事業を実施した団体

静岡県（地震防災センター）

事業概要

災害時に“正しい情報を見極める”“命を守る行動につなげる”ためのメディア情報を読み解くことがテーマです。

当社は2001年４月から、毎週土曜昼に地震などの災害から命を守るための情報を伝える啓発番組『地震・防災チェック』を放送しています。

今後30年以内の発生確率が「70～80％」とされている南海トラフ地震や、近年は頻繁に起こる豪雨災害。こうした災害時に出回る「フェイク画像」「デマ」「根拠のないうわさ」は、早く正確な情報を入手したい人々の不安や怒りをあおります。ネットやＳＮＳの普及によって、それが拡散する速度は、かつてない早さになっていると言います。さらに生成ＡＩの進化によって、偽の画像の精度が飛躍的に上がり、一見しただけでは見分けがつかないほどのものが出回っています。

例えば、災害時に被災地の画像が誤っている場合、人々が避難の判断を誤ったり、防災機関が確認に振り回されたりするなど、負の連鎖を招くことが予想されます。一方で、自分は引っ掛からないと思っている人が多いというデータもあり、災害時ほど、いかにして正しい情報を見分けるかが重要になります。

2024年12月は、静岡県にも大きな被害をもたらせた昭和東南海地震から80年。そして、2025年１月には阪神・淡路大震災から30年となりました。

ネット社会が急拡大し、災害時に情報を入手する手段も大きく変化した今こそ、災害時に惑わされないためにメディア情報をどう読み解いたらいいのか、普段から接する情報に対するリテラシー向上を図るための取り組みとして、さらには私たち報道機関の災害報道、情報発信への理解を深めてもらうためにシンポジウムの開催を企画しました。

事業の成果

日　時：2024 年 12 月 7 日 13 時 30 分～16 時
会　場：静岡県地震防災センター　２階ないふるホール
参加者：89 名

【第１部　基調講演】

「災害時における偽情報・誤情報の現状について」
登壇者：国際大学グローバルコミュニケーションセンター准教授　山口真一氏

第１部では、ネットメディアに詳しい国際大学の山口真一准教授が講演し、災害時に偽情報、誤情報が広がる実態について、各地の災害などを例に説明しました。

山口氏によると、災害時のフェイク情報には実際の被害と異なるフェイク情報、救助を求める偽情報、義援金などを装った情報などのパターンがあるということです。最近では生成ＡＩによるフェイク情報も広まりつつあり、その影響は災害時のみならず、さまざまなところに及ぶ恐れがあるといいます。

山口氏は「まず大事なのが“自分もだまされること”を知っておいてほしい。誤った情報、フェイク情報に出会ったあと、それが誤っていると気づける人はすごく少なく、14.5％しかいない。拡散したい時だけでもその情報を検証し、真偽のほどが分からなければ拡散しないという意識を持つことが大事だ」と話しました。

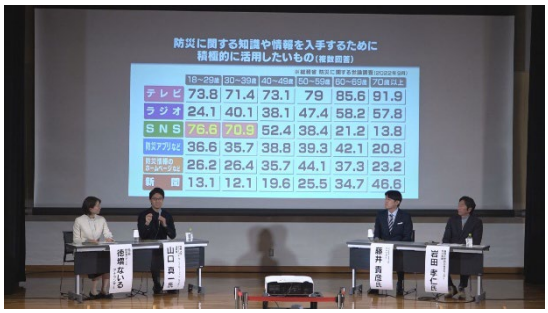
また、山口氏はＳＮＳを通じて正確な災害情報を入手するのに、事前に自治体やメディアなどの情報元がはっきりしたアカウントをフォローしておけば、有事の際にも有効に利用できるのではないかと話しました。

【第２部　パネルディスカッション】

登壇者：国際大学グローバルコミュニケーションセンター准教授　山口真一氏
日本テレビ『news zero』キャスター　藤井貴彦氏
静岡大学防災総合センター特任教授　岩田孝仁氏

進　行：当社アナウンサー　徳増ないる

第２部のパネルディスカッションには山口氏に加え、静岡県の危機管理監を務めた岩田孝仁・静岡大学防災総合センター特任教授と日本テレビ『news zero』の藤井貴彦キャスターが登壇し、災害時のメディア利用のデータなどを示しながら、災害時の情報流通の課題やメディアの役割などを議論しました。



藤井氏は「10%のフェイク情報があると、残りの 90%の正しい情報も疑わしく思われてしまう。メディアはそれを正しいと証明するために苦労する。ＳＮＳの負の側面が強まっていると感じる」とニュースを伝える立場から考えを述べると、山口氏は「東日本大震災のときはＳＮＳの情報発信が有効で、命を救った。しかしこれほどフェイク情報が増えて閲覧数稼ぎを目的に使われるようになると、ＳＮＳはインフラではなく一企業の収益の場と化してしまった」と現状を分析したうえで「災害時には別の情報伝達の手段を行政が用意する必要があるのではないか。生成ＡＩの作成物を判断する技術が進んでおり、こういったものをマスメディアが活用することも必要だろう」と提案しました。

続いて伝える側の意識について、岩田氏が「災害時には伝える内容や手段だけでなく、誰が伝えるかということも大切。いつもテレビ画面で見ているアナウンサーが避難を呼びかければ人は動く」と話すと、これを受け藤井氏が「テレビの情報を信じてくれる人がたくさんいるのだから、発災当初の対応が大事だ。とにかく逃げてくれと言うことが大切で、逃げないという判断をしないように呼びかけようと後輩にも話をしていた」と実体験をもとに語りました。

山口氏は「ＳＮＳは迅速に、現地の声を知ることができ、頼りにする人が多いのはわかるが、その情報は玉石混交。それを踏まえて、参考として触れる程度にすべき。ＳＮＳに接する時間の長短と騙されることとの関連はないとの調査があり、長く接しているから騙されるというものでもない。自分は騙されない、大丈夫だ、と思っている人が危ない」とＳＮＳの特徴を踏まえて注意を促しました。

ＳＮＳの活用について、岩田氏は行政で防災業務を担当した経験から「何か起こった時だけでなく、普段からの情報発信の積み重ねが大切。災害時にいきなり信じてくれ、というのは無理だろう。また、伝える側が信頼を得るためには、良くない情報も隠さずに伝えることが必要ではないか」と提案すると、藤井氏は「ＳＮＳに載っている情報は、実はテレビからの情報ということがある。それならば、テレビがもっとＳＮＳを活用しなければいけない。テレビとＳＮＳはライバルではないと考え、手を組んでいかないといけないのではないか」と述べました。

最後に山口氏が、①正確な情報を迅速に伝えることが必要であり、そのためには平時からの情報発信と地域の人たちとの連携が大切、②より多くの人にマスメディアの正しい情報を伝えるためにＳＮＳを使った発信の工夫が必要、③ネット上の言説の事

実確認が必要であり、フェイク情報をチェックして伝えていくことにより、情報環境は良くなっていく――と総括しました。

【参加者の声】

（大学生）学生時代の情報の収集源はXやインスタグラムが中心。多分、今まで正しいと判断してしまった情報の中にも、嘘の情報が紛れていたのでは、と今日あらためて気づかされました。

（小学生の母親）子どもが小さいのでこれから先、多分、情報に惑わされていく時代になると思って、勉強しにきました。ちょっと怖いなと思うこともあったけど、そういう誤情報があるということも理解しつつ、付き合っていけるようになりたいと思いました。

【シンポジウムの開催を通じて】

今回、ネットメディアの専門家・山口氏をお招きし、災害時におけるフェイク情報のパターンや、誤った情報を拡散しない心がけを県民とともに学ぶことができました。藤井アナの「10%のフェイク情報があると、残りの 90%の正しい情報も疑わしく思われてしまう」とはまさにわれわれも感じていたことで、それを正す努力を怠ることはできないこともあらためて感じました。今後も、毎週土曜放送『地震・防災チェック』などを通じて、県民がフェイク情報に惑わされないよう、正確な情報を伝え続けます。

○シンポジウム　全編動画
https://youtu.be/jnUD4vTr_-M?feature=shared

○シンポジウムの様子を伝えるニュース
https://youtu.be/P5iq6fRcC6E?feature=shared

○シンポジウムについて伝える「地震・防災チェック」12/14 放送
https://youtu.be/I1zPLKSx5Cg?feature=shared

○シンポジウムについて伝える「地震・防災チェック」12/21 放送
https://youtu.be/r5CZiPcz5ZU?feature=shared

以　上